山村の元教諭Ａさんのお話

西本　陽一

北陸にある大学に勤めていた時、学生たちを連れてある山村に調査実習に行った。教員ひとりと学生２～３人でグループを作り、住民のお宅にお邪魔して２時間前後聞き取りをするのが活動の中心だった。今では集落の横を幹線道路が通り、交通的にはかなり便利になったその集落は、かつては交通の便が良くなかった。その集落で2021年に、小学校の先生を長年務めた93歳の男性にお話を聞いた。地元の学校の校長先生もされた方で、町の名士といった立場の方だったが、年齢のために最近は急に弱ったと他の住民はおっしゃった。

私と学生２人でお宅を訪ねると、こちらの意図を察して集落の昔と現在の違いについて話された。しかし、若い学生を見たせいか、後半はご自身の人生を振り返り、学生に諭すような話になった。

以下は、そのお話の一部を、お話を聞きながら取ったメモにもとづき再構成したものである。固有名詞は、人名や地名の多くは出てくる順に、A、B、C・・・と匿名化した。以下に考察を加えず示す。

＋　＋　＋

・・・今でいうと高校、昔の旧制中学に行くというのは、朝３里、夕方３里の道を通えるものはおらなんだ。初めて通ったのは、オジのB、B商店を作った人、が初めて（旧制）一中に通った。誰もかれも反対したけど、母親だけが「行け」と言った。費用がないから、郵便局さんの仕事をしとった。○○郵便局（集落の郵便局）から郵便をもって××の郵便局に納めて、当時△△図書館の近くにあった学校まで歩いていって、夕方また××の郵便局から○○の郵便局まで（郵便を）もってきて、次の日に母親が（〇〇集落の家々に）配達する。Bさんが郵便局長をしとった時か、もうCさんに交代した時か。○○の郵便局。

その後オジは、広島の高等師範に入学して、卒業した。オジさんは卒業して、一年だけ、能登に、能登の僻地に勤めていた。ほんとにかわいらしいかわいらしい生徒かないかおって、一年でやめて、小将町で、商売、文具業を始めた。

文房具したら、偉い人はみな師範学校を出とる。そういうところに文具を

納めると、こおてくれた（買ってくれた）。Ｂは石川師範より上、高等師範だと言うて、信用があって、文房具一切こおてくれた。商売は上手でもなかったけど、うまくいった。注文がないでも、もっていった。あれ何て言うか、購買、購買にもっていった。鉛筆でもなんでも、だいたい品が薄くなったろうと思ってもっていった。

オジさんが、○○から障子紙をもって行って、障子紙は２尺８寸。障子は３尺。２寸足らん。オジさんが考えて、10枚をつないだ。つないで、丸くして、売った。そしたら（人は）他に行かず、Ｂの障子紙をこうてくれた。そしてついでに、鉛筆や他のものもこうてくれた。ほんとに幸せやったと（思う）。誰かがオジさんに聞いたら、仕事が全部終わって、障子紙をつないで、売った。なまっちょろいことで、（ものは）売れん。なんでも努力せんと、と言ったそうや。

今の人はＢの３代目。初代は「D」（という名前）。

２代目の時は、書類の上にハンコを集めてる時代に、国会議事録の書類、５社で引き受けてやっとったとしたら、４社までは東京の会社で、Ｂだけが（東京以外から）引き受けて、やっといた。ドイツから高価な機械を、Ｂは一番に買ってきて、使った。

やっぱり、親が偉かった。学問させてくれたというのは。小さいころから勉強していれば、世間を広くできるし、いろんなことに気づける。勉強は、死ぬまで勉強や。

（わしが）二中を２年出させてもろたこそ、卒業はできなんだが、出させてもろたこそ、わしの一生は幸せだった。Ｂのような苦労はせなんだ。下宿させてもろた。

母親が（わしが）５つの時に亡くなった。（昔は）病院は、簡単に行けなかった。今と違って保険は効かん。全額負担。膨大な金がかかった。そういう時代に母親が死んだ。

昔「長持」ちゅうね。嫁に来るときに、座布団でなし、大きな布団入れてくる、畳一畳ほどのもんに、それに乗せてもらって、村の人に吊ってもろた。隣のおばあちゃんが言っとった。わしは小さかったから、知らんけど、後で聞いた。（母親は）「死にとおない、死にとおない」と言って、死んだ。今の大手町病院まで行って、死んだ。

死んだもんもそやけど、残ったもんも大変なもんや。子供としてわしは寂しゅうて、寂しゅうて、どうもならん。

その頃は、日が暮れるまで遊んどった。E、Ｆも同級生。お寺を中心とし

て、遊んどる。日が暮れるまで。夕方になると「さよならー」ちゅうて、家に戻る。みんな帰るけど、わしは母親おらんさけ、帰ったとこで、あいそないんや。普通の人なら、帰ると、かきもち焼いてもろたりした。わしは、帰りたくなくて、茶屋（駄菓子屋）に行って、飴玉、一銭かぐらい買えた。それをポケットにもっとって、友達を誘う。すると、飴玉欲しゅうて、20分か30分か遊んでくれる。そういうことしとったら・・・

G（茶屋をやっていた家）で飴玉こうて、友達誘って、遊んどった。そんな金が余るほどの家じゃなかった。薬もかわならん、病院も連れていかならん、でたくさんお金を使った。母親が亡くなった後、親父は真っ暗になっても仕事せなならん。母親は紙漉くこと（紙漉きの仕事―当時〇〇集落は製紙業が盛んだった）は上手だった。母親が亡くなり、父親は、おそーまで、田んぼだけやっていた。父親はたのもし（頼母子講）、今の銀行と一緒、そこから金を借りて生活しとった。そういう時代に、わしは飴玉こうて遊んどった。

（ある時）親父は、おそー帰ってきて、どうやら小銭が足りん、ここ置いとった小銭がないと言うと、亡くなった姉、Hが「アンカ（長男―Aさんのこと）が盗っとる」と言うて。親父は怒って怒って、「お前みたいな泥棒は家に置けん」て言うて、隣との垣根に大きな柿の木があって、その柿の木に縄で縛りつけて、「お前みたいな泥棒は家に置けん」と言うて。隣の人が「堪忍しちゃら」と言うても「泥棒は家に置けん」ちゅうて。わしは、泣いて、泣いて、いつの間にか眠っとった。そういうこともあった。

人の命がなくなると、大変なもんや。親というもんは大変なもんや。それがわしが二中に行く、決定的なことだった。

小6のときに、親父に、医者になりたいと言うた。母親も親父もわしも（体が）弱いし、人のことを助けたいと言ったら、親父は「それはいいことだが、Iの尋常小学校にいても、いつまでたっても医者になれん。医者になるには、一中、二中、三中とかに行かなきゃならん」。一中は遠いし、三中は遠いし、二中は小立野にあるけん。オジみたいに通う元気はないし、二中の近くの、小立野の当時下駄屋に下宿させてもらった。5円下宿代払って、下宿しとった。

ほしたら、二中に行ったら、二中の試験を受けた。今のJ中の校舎だけど、発表見に行くにもさんざん歩いていかなならん。Kが中署か南署かで巡査しとった。Lというオジさん。受かったら、電話してやると言う。その頃は、郵便局と巡査しか電話なかった。

12時発表と決まっとった。ほしたが12時になっても、いつまでたっても電話がかかってこん。わしは、布団かぶって寝とった。恥ずかしいやら、悲しいやらで。今でいうと小学校6年。泣いとった、布団かぶって。

今ならね、パソコンていう、ケータイもかかるし・・・。ほしておったところが、夕方になって駐在から合格おめでとうと言ってくれた。とんでもない話。

あとで聞いたら、東浅川のMという学校で、校舎の一部を借りて奉仕活動があって、二中生が失敗して、ボヤ騒ぎがあった。それで発表どころじゃないちゅうて、夕方まで発表が遅れた。今ならオンラインちゅうて、オンラインで外国まで行ける時代や。

ほいで二中に行けるようになった。親父はえらい（大変）というか、受かったら10円ずつ仕送りせなならん。親父は職はない。不況の頃、東京の亀の湯の三助に雇ってもろうて、わしに10円ずつくれた。その時分の東京というと、今で言う外国やぞ。昭和16年。わしの子供は4人おったけど。外国まで行って出してあげる気力はなかった。親父には、大学まで出してくれたけど。

N寺の前の住職さん、Oさんが、二中を初めに出て。その時分、門徒さんは、「若さんの学資」ちゅうて、別に集めた。うちは、・・・。そんなガンコなことは、わしは出来ん。それが、親父は出してくれた。わしは今でも、親父に感謝する。

ほいで、一所懸命勉強した。勉強したつもりでも、一学期か二学期か、150人中137番だった。今で言うと、五分の一の一番下、20点の成績だった。順位は150人中の137番。親父は手紙で、そんな成績ならやめてしまえ」て。一所懸命勉強したけど、そんな成績。

教師になってから、どんな成績でも、（生徒には）希望を持たせなあかんと思った。わしの成績は、国史が戊、数学が甲で、あとは乙。そして、おまけに歴史の先生が、次の学期の始めに、皆の前で、「A君のような答案を書くでない」と言った。戊だった原因は、一枚の紙に、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康について書けというものだった。わしは答案に3人の特徴を書いて。「織田信長は気が短い」て書いて、それから「家康は我慢強い」とか書いて、政策がどうとか書いとらん。10分ぐらいで出来たけど、他の誰も（答案を）出さん。誰も出さんやさかい、（わしも残って）おった。おったところが、先生が、「A君・・・」と、細かく箇条書きに書いて分かっとると思とるけど、もっと細かく書かなんならん。わしが教師になって、・・・出来んと言

うたらあかん、それが出来んでも・・・。

たくさんの先生にお世話になって（お世話になったから）、その先生の名前の名前は覚えとらんけど、あだ名は覚えとる。「へんずり」。いつも、こうやっとる（と、下半身を掻く仕草をする）。梅毒系の人だったと思う。

そっで、２年の二学期の成績は30何番やった。いやー、嬉しかったぞ。二中の30何番ちゅうたら、泉（一中）には負けるけど、三中には勝つ。ヨウネン学校（不明）は陸軍の学校で、２年済んだら行ける。行けるのは、金沢では10ぐらい。そのとき、二中におって、一中と二中は競りおうてた。そういう時に、わしや数学だけは、ヨウネン学校に行く連中よりも出来た。・・・数学は好きで、好きで。二中と言ったら、その当時は、特別の、二中だけが作うとる教本があって、それを解いて、解いて。

２年の夏休みに親父が（帰って）来て、「お前を学校出そうと思ったけど、体がもたん。暇をもらって帰ってきた。学資は出せんけど、堪忍してくれ」と言った。親が子供に謝った。

歳が行って（歳取ってからやっと）分かった。その頃は「ひどいなあ」と、わしより勉強の出来ない人も、学校行っとるぞ、と。100位ほど順位の低い人も行っとるに。今思うと、とんでもないことを思ったと。

２学期から学資がなかった。バイトなんかない時代。それでわしは辞めなならんもんで、その時分に、好きでなかったけど、誰の作たかしらんけど「学を志して・・・」という漢詩を、二中の時習っといて、それを思い出して、なんでも学問で身を立てようと思って、そしたら師範学校があるというて。当時、師範は寮生活で、行けば一月に19円、寮費は（別に）付いとる。親父から10円当たらんでも（もらえなくても）行けると、願書をもらいに行ったろ。そしたら担当の人が、二中生が師範を受ける頭はなかろうと（そんな道理はないだろうと言った）。師範はその当時、健康であって正常な人なら無条件で入れてあげるという制度だったんで、「二中を辞めて師範をうける方はなかろう。」

そしたら締切までに（二中から書類をもらって来なければならなかったが、締切が過ぎてしまった）。師範も行けれんと。たまたまその時代に、今で言うと中二の学生で、高等小学校までが６年やさかい（旧制中学の）二中の二年で、中二の学生で、健康だったら、代用教員、助教と言うとったになれると聞いて、県の教育委員会に申し込んだ。

一週間ほどしたら、Ａ君を浅川村立助教に命ずと、書が来た。今で言うと・・・国民学校に行った。そこに行ったら、校長先生は、君はわかいから

小原（おはら）分校に行ってくれと言った。1，2，3年の（しかない）小原分校に行った。中学二年の時に分教場に行った。

分教場（にいたの）は、教務員とわしだけ。分教場では、校長（の仕事）でもなんでも（しなきゃならん）。本日入学式があると、まず入学式の案内ださなん。そうしたら（いいか）分からんけど、前の人、先輩の書いた文章を、昔のロウガン（？）で、ケンシ（？）で書いた。11軒の校下（校区）。

いよいよ入学式。只今より入学式を始めます、と言うて。君が代、オルガンがあったけど弾けるわけない。情けないもんやったぞ。どこへ出ても情けないもんやった。そでも、どこの先生も「A君」と言うてくれた（馬鹿にせず仲良くしてくれた）。

（話を終えたあとで、聞いていた学生たちに向かって）あんたらが、こうやって勉強してるのはとてもよい。すぐに役にたたんような学問をすることはとても大切なことだ。・・・